

イスラムと西欧 対立は「宗教」のせいか

それは「宗教」の問題なのか——。同志社大で先月あった公開シンポジウム「イスラムと西欧近代の問題」で、その問いかける重要性を考えた。最初から相手のことを分かってほしい人が、分かり合えない理由として安易に「宗教」を持ち出してはいないか、と。

同志社大でシンポ

シンポのサブタイトルは「共約不可能性と共存可能性を突き詰める」。同大学一神教学際研究センター長の小原克博教授は「共約不可能性」を、「共通の物差しで価値を測ったり、それらを橋渡ししたりすることができないこと」と解説した。続いて同大学グローバル・スタディーズ研究科長の内藤正典教授が、イスラムと西欧近代の価値体系の共約不可能性を考える例として、フランスでの「スカーフ論争」を挙げた。

公の場で「宗教」を表に出すことを禁じる「世俗主義」を掲げるフランスでは、公立学校などで女性が発見などを隠すためにスカーフをかぶることも禁止されている。だが内藤教授は、果たしてスカーフはイスラム教徒にとって宗教的なシンボルか、と問いかけた。

「イスラム教徒は（頭髮やうなじ、のど元など）羞恥心の対象となっているセクシュアルな体の部位を隠しているだけで、イスラムを強調するシンボルではない。それをいくら言ってもフランスは聞き入れない」

背景にコーランがあるとはいえず、人に見せるのを恥ずかしく思う体の一部分を隠す女性に、その覆いを脱ぐよう求めることは、宗

スカーフ論争にみる 共存探る大切さ

教上というより人格上の侮辱といえる。そんな屈辱感を味わわせてはならないという観念はイスラム教徒以外にも理解できるはずだ。分かり合える部分があるのに、共存を模索するのに手間がかかると感じると、安易に宗教のせいにして「共約不可能性」に逃げ込んでいるのではない。

日本では子どもが生まれると神社にお宮参りに行き、結婚式はキリスト教の教会で挙げ、亡くなったら仏式のお葬式を出す、ということにそれほど矛盾を感じない。海外からはこうした態度を宗教的に不可解だと見る向きもあるが、日本では宗教的な儀式であるという感覚は薄いのだろう。

世界中で多くの衝突や紛争が「宗教上の対立」によるものだと説明される。そこに「それって宗教ではなく、別の問題なのでは」とつつこみを入れることも、日本人ならできるのではないか。「共存」のために日本が果たせる役割は大きいと感じた。（小林正典）



同志社大の公開シンポジウム。イスラムやキリスト教の専門家らが意見を交わした＝9月、京都市上京区